

## 近代中国の生活綴方における「生活と表現」 ——豊子愷の児童教育観を手がかりに——

東北大学大学院・閻秋君

### 研究目的

今、東アジア各地では子供達の泣き声が聞こえる。

その声に耳を傾けると共通するフレーズが浮かび上がる。それが受験競争の過酷さと、競争の末に摩滅してしまった自我を回復したいという心の叫びである。

教育研究者・大田堯（1918～2018）による人格の完成、いわゆる「ひとなる」というテーマは、世界の教育界においても共通する課題である。しかし、中国や韓国、そして日本における苛烈な受験競争は、幼児期から家庭に成績至上主義的評価を植え込んだ。成績の好悪がそのまま人格的評価に結び付けられたため、成績による競争意識の桎梏のなかで、自我は傷つけられることとなり、若年層の多くが自己を低く評価するようになった。

この窮状から抜け出し、ひとなるための教育を如何に切り拓くべきか。ひとなるための教育実践として、日本発祥の教育である生活綴方運動があげられる。生活綴方運動は、主に子どもが自分自身の生活の中でみたり、聞いたり、考えたりしたことを、自分自身の言葉で文章に表現する教育運動である。常に教師側に答えがある従来の教育に対して、子供の感覚や柔軟な思考を重視した点で画期的であり、大田も「世界教育遺産」と高く評価されている<sup>1</sup>。ひとなるための教育には国境はない、これらの教育運動は日本だけに留まらず、諸外国における生活綴方を検討することも必要になるだろう。

そこで、申請者は今後の修学計画として、1920年代の中国で生活綴方に注目した豊子愷（ほう しがい、FENG Zikai、1898～1975）の児童教育観を考察することで、日本と中国の生活綴方の類似点および相違点を明らかにする。それによって、これからの日中両国の教育共鳴にヒントを提示することができるのではないかと考えている。

### 研究対象

豊子愷と言えば、漫画、散文、翻訳、芸術教育などの多分野<sup>2</sup>で活躍した人物であるが、ここでは、生活綴方に関連する豊の教育活動<sup>3</sup>に焦点を絞って紹介する。

五四新文化運動の風潮のなかで、芸術および美育は中国の近代化実現のための重要な手段と広く認識されていた。1919年、豊は同人とともに、中国で最初の美育学術団体である

<sup>1</sup> 当時、天皇中心の小中学校の教育は、全面的に国家権力の支配下にあったが、国語教科の作文の時間だけは例外であった。そのため、生活綴方の教師たちは、子どもたち自身の生活やそこでの喜怒哀楽、それを子どもたちが作文で自己表現することに注目した。それによって、文章表現をさらに洗練させる先生と、作文を書く子どもが響き合うことになった。大田堯、山本昌知著『ひとなる—ちがう・かかわる・かわる』（藤原書店、2016、54～61頁）参照。

<sup>2</sup> 弘一法師（俗名李叔同）の高弟として、あるいは竹久夢二の「春之巻」の逸話でよく世間に知られている。豊は挿絵集『子愷漫画』、散文『縁縁堂随筆』のほかにも、芸術教育に関する著述や翻訳を多数発表し、『源氏物語』、『草枕』などの翻訳を手がけるなど多方面で活躍した。

<sup>3</sup> 大野公賀「豊子愷における自己確立のための模索—浙江省立第一師範から東京留学まで—」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第12号、2009、1～27頁）参照。

中華美育会を設立した。その後、豊はいくつかの学校で美術教師をしていたが、次第に自らの教育方針に対して疑問を抱くようになった。そのため、1921年に豊は日本へ留学し、竹久夢二（1884～1934）の作品から大いに影響を受け、西洋画から漫画に転向した。帰国後の豊は理想教育の実現を求めて、政治権力の介入を受けない私立学校・春暉中学に就職した。この時期から、豊は初等教育のあり方に関する論文を執筆し、子どもの個人としての人格への尊重を唱え始めた。1925年、豊は上海で立達学園（中学校）を創設し、また同校の教育理念に賛同する葉紹鈞（YE Shaojun、1894～1988、中国語表示：葉聖陶）らとともに立達学会を発足させた。1932年までの間、豊は数多くの作品（随筆、漫画など）を創出し、葉の生活綴方の代表作『開明国語課本』にも挿絵を描いたのである。

### 先行研究

従来、生活綴方が日本特有のものとして研究されてきたが、近年、日本の生活綴方教育史において重要な位置にある児童文学誌『赤い鳥』と、葉の『開明国語課本』（1932）を、それぞれの綴方教育理論における「生活」の観念から比較するという研究が行われた<sup>4</sup>。同時代の中国における生活綴方教育への関心は、日本の生活綴方の研究に新たな成果を提供したと言える。本研究はその研究視点を導入し、作文教育以外の分野（豊による児童漫画、教育活動など）について検討を試みる。というのは、「生活」と「表現」の溝を埋めるという役割を果たす生活綴方について、文章による表現ということ以外に、絵による表現、音による表現などいろいろな教科から考えられるという大田の考えに共鳴するからである<sup>5</sup>。

### 研究計画

申請者は豊による生活綴方教育の言論を、児童人格形成の視点から考察する。本研究では以下のステップで進めていく予定である。

ステップ①：日本の生活綴方に関する資料収集に重点を置く。現時点で挙げられる重要文献は、全国誌の『綴方生活』、東北地方誌『北方教育』、児童文学誌『赤い鳥』がある。まずはそれらの資料の閲読から始め、それを手がかりに児童人格形成に関連する彼らの言論を確認していきたい。

ステップ②：本研究の重要な位置にある豊の児童教育言論の分析にとりかかる。調査対象は主に『豊子愷全集』全50冊（海豚出版社、2016）とする。そのなかで、児童教育言論のほか、豊の日本滞在に関連する資料にも目を配る。それらの資料（日記、回想録）は、豊が日本から受けた影響を分析する格好の資料と予測される。

ステップ③：③では、ステップ①で明らかになった日本の児童人格言論、ステップ②で収集した豊の児童人格言論を対照しその解析を試みる。その上で、1920年代の日本と中国の生活綴方の類似点および相違点を明らかにしたい。

<sup>4</sup> 鄭谷心『『赤い鳥』と『開明国語課本』に関する比較研究：鈴木三重吉と葉聖陶の綴り方教育理論における『生活』の観点から』（『教育方法の探求』第15号、2012、57～64頁）参照。

<sup>5</sup> 大田堯「生活綴方における『生活と表現』—佐々木昂の仕事をふり返りながら—」（『大田堯 自撰集成 2 ちがう・かかわる・かわる—基本的人権と教育』、2014、348頁）参照。